

第三項 三十七、八年戰役後ヨリ大正五年ニ至ル時代

明治四十二年十月二十三日内令第三百八十二號ヲ以テ新ニ艦内編制規程ヲ定メラル從來此種ノ規程無ク主トシテ明治三十五年内令第三十八號軍艦部署標準ニ據リシモ不徹底ナリシガ爲今回新ニ教育本部ノ提案ニ成リシモノニシテ立案ノ主旨ハ艦内ノ甲板區分ヲ廢シテ專ラ分隊組織ノ一系統ト改メタルモノニシテ軍事教育ノ進歩統一上不取敢策定セラレタルモノナリ今水雷術(科)ニ關係アル事項ヲ摘記シ參考ニ資ス

艦内編制規程摘錄

第一條 艦内編制ハ戰鬪ニ適スルヲ以テ主眼トシ艦内ノ各部、物件及人員ヲ區分編制スルモノトス

第二條 砲臺、水雷砲臺及機關部ノ區分ハ左ノ諸號ニ準據スベシ

二、水雷砲臺

イ、水雷砲臺ハ魚形水雷發射指揮上ノ便ニ依リ發射管ノ裝備位置ニ應ジテ之ヲ數群ニ分チ艦首水雷砲臺、艦尾水雷砲臺、後部

水雷砲臺等ト稱ス

ロ、水雷砲臺ハ一區劃内ニアル發射管若ハ相接近シアル發射管ニ就キ之ヲ區分スルモノニシテ場合ニ依リ艦首水雷砲臺ヲ前部

水雷砲臺ニ艦尾水雷砲臺ヲ後部水雷砲臺ニ合併スルコトヲ得

ハ、發射管ノ裝備上水雷砲臺ヲ前後ニ區分シ能ハザルトキハ左右兩舷ニ區分スルコトヲ得

第三條 下士卒ハ其ノ兵種ニ應ジ左ノ如ク呼稱ス(略)

第四條 戰鬪部署ニ於ケル下士卒ノ區分名稱等ハ左ノ諸號ニ依ルベシ

八、水雷砲臺附下士 水雷砲臺ニ在リテ傳令ニ從事シ發射管ノ操作及諸準備ニ注意スル者ニシテ必要ニ應ジ之ヲ配シ兵曹ヲ以テ

之ヲ充ツ

九、發射管員 發射管ノ操作並ニ魚雷ノ調整、裝填、發射等ニ從事スル人員ニシテ水兵部員ヲ以テ之ニ充テ其ノ各發射管員中ノ首席者ヲ發射管長ト稱ス

十、探照燈員 探照燈ヲ操作スル人員ニシテ水兵部員ヲ以テ之ニ充テ發射管員ヲシテ兼ネシムルヲ例トス

十一、爆藥庫員 線火藥其ノ他爆藥ノ供給ヲ爲ス者ニシテ水兵部員ヲ以テ之ニ充テ其ノ各庫ノ首席者ヲ爆藥庫長ト稱ス

十二、頭部庫員 魚形水雷頭部ノ供給ヲ爲ス者ニシテ水兵部員ヲ以テ之ニ充テ發射管員ヲ以テ兼ネシムルヲ例トシ其ノ各庫ノ首席者ヲ頭部庫長ト稱ス

十三、水雷要具庫員 水雷要具及火工品ノ供給ヲ爲ス者ニシテ水兵部員ヲ以テ之ニ充テ爆藥庫員若ハ電路員ヲシテ兼ネシムルヲ例トス

例トス

十四、電路員 通信用、發砲用其ノ他電氣裝置(砲側ニ於ケルモノハ砲員、機關部ニ屬スルモノハ機關部員ノ各受持トス)ノ監視及修理ヲ爲スモノニシテ水兵部員ヲ以テ之ニ充ツ

(註)前掲八ヨリ十四迄ノ諸員ヲ總稱シテ水雷部員ト謂フ

十八、見張員 機械水雷、魚形水雷、其ノ他危險物ノ浮流艦艇ノ接近等ニ注意スル者ニシテ水兵部員若ハ信號部員ヲ以テ之ニ充ツ

二十、電信員 無線電信及無線電話ノ通信ニ從事スル者ニシテ信號部員ヲ以テ之ニ充テ其ノ主席者ヲ電信長ノ稱ス

第五條 前條ニ依ルノ外平素ノ職務ニ對シ所要ノ下士ニ特別ノ職名ヲ附ス其ノ種類並ニ之ニ充ツベキ者ハ左ノ標準ニ依ル

水雷衝教員 高等科掌水雷證狀ヲ有スル者ニシテ水雷砲臺附下士ノ内若ハ電路員、發射管長中ノ下士

掌水雷長屬 水雷砲臺附下士ノ内若ハ頭部庫員爆藥庫員、水雷要具庫員、電路員中ノ下士

第六條 軍艦ノ下士卒ハ左ノ諸號ニ準據シテ若干ノ分隊ニ編成シ各分隊ニ分隊長ヲ配ス

一、一砲臺ノ下士卒ハ分隊スルコトナク同一分隊ニ編入ス

五、水雷部員ヲ以テ別ニ一個分隊ヲ編成ス 但シ發射管ヲ有セザル艦ニ在リテハ之ヲ他ノ分隊(機關分隊ヲ除ク)ニ編入ス
六、見張員、傳令員(共ニ雜部員ヲ除ク)砲火指揮觀測補助員ハ其ノ關係多キ分隊ニ編入ス

第七條 分隊ニハ左ノ諸號ニ依リ番號ヲ附スベシ(略)

第八條 砲臺ヲ指揮スル分隊長ヲ又砲臺長ト稱シ之ニ屬スル將校ヲ砲臺附將校ト稱シ兵曹長上等兵曹ヲ水雷砲臺附兵曹長若ハ上等兵曹ト稱ス

第九條 准士官以上ヲ配置スルニハ左ノ諸號ニ依ルベシ(略)

第十條 下士卒ヲ配置スルニハ左ノ諸號ニ依ルベシ(略)

第十九條 軍艦始メテ本規程ニ依ル艦内ノ編制ヲ爲シタルトキハ砲臺、水雷砲臺、機關部ノ各區分表(別表)及分隊表(別表)ヲ海軍大臣ニ提出スベシ(後略)

第二十條 艦ノ大小構造、兵裝、儀裝等ニ依リ本規程ニ準據シ能ハザル場合ニハ適宜斟酌スルコトヲ得

下士卒全定員五十名未滿ノ軍艦並ニ驅逐艦水雷艇陸上團隊部等ニ在リテハ適用シ得ル範圍ニ於テ本規程ヲ準用スベシ
第二十二條 軍艦部署規程、艦艇配員簿ハ別ニ之ヲ定ム

附 則

本令ハ明治四十二年十二月一日ヨリ之ヲ施行ス

(各別表略ス)

同 四十三年六月海軍教育本部長ハ海軍大臣ニ上申スルニ大戰艦ノ水雷長及驅逐艦長ノ一部ヲ中少佐定員ニ改メラレ度件ヲ以テセリ蓋シ艦型及關係兵裝ヲ進歩發達ハ自ラ實歷經驗ノ豊富ナル人物ニ待ツニアラザレバ其ノ全能發揮ニ由ナク現狀定員ハ本目的ニ對シ聊カ安ンジ能ハザルモノアレバナリ其ノ全文左ノ如シ

大戦艦ノ水雷長及驅逐艦長ノ一部ヲ中少佐ニ改メラレ度件上申

明治四十三年六月二十日

海軍教育本部長

現定員令ニ依レバ鹿島香取以降ノ大戦艦ノ水雷長ハ少佐ニシテ驅逐艦長ハ少佐若ハ大尉ナリ之等ヲ件名ノ如ク中少佐ノ定員ニ改正方御詮議相成度

理 由 畫

第一、艦積ノ膨大ハ中佐航海長ノ必要ヲ生ジ砲力ノ増加ハ中佐砲術長ノ必要ヲ生セルガ如ク魚雷ノ發々タル發達ハ更ニ中少佐水雷長ノ必要ヲ生ズルニ到レリ現下ノ趨勢ニ鑑ミルニ教育ハ兵器ノ進歩ニ隨從シ能ハザルノ觀アリ例セバ魚雷ニ於ケル縱舵機及加熱裝置ノ如キ無電ニ於ケル音響受信器ノ如ク時世ノ急進歩ハ教育ノ普及ヲ待テ始メテ之ヲ艦船ニ配給スルノ迂ヲ爲スヲ許サズ故ニ水雷長タリ驅逐艦長タルモノ學識經驗共ニ兼スルニアラザレバ此間ニ處シテ新兵器ノ威力ヲ適當ニ發揮シ能ハザルハ明カナリ從來ノ報告ニ徴スルニ當事者ノ優秀ナルモノハ苦心研究ノ結果漸次之ニ慣熟シ徐々ニ其果ヲ收メツツアルモ其ノ然ラザル者ニ於テハ多少危懼ノ念ニ驅ラレ手下ニ避ケルノ傾向ヲ生ジ徒ラニ當局ノ施設ヲ待ツ者往々是レ有ルガ如シ之レ其ノ人ノ不能ノミニアラズ實歴經驗ノ乏シキ實ニ之ガ主因ヲ爲スモノナリ、且一時沈滞ノ狀態ニ在リシ水雷術ノ氣運ハ近時魚雷ノ急速ナル發展ト檢定戰關兩發射ノ實施ト相俟テ俄然向上ノ趨勢ヲ示シ將校ノ斯術ニ傾倒スルモノ漸次増加ノ傾向アルハ洵ニ喜ブベキ現象ニシテ水雷術ノ進歩ハ刮目シテ見ルベキアルニ至レリ

前陳諸種ノ狀況ヲ綜合スルニ水雷兵器ノ急劇ナル改良進歩ニ適應シ得ル爲且ハ斯術ノ獎勵發展ノ途ヲ講ズル一法トシテ直接其ノ掌ニ當ルベキ水雷長驅逐艦長ノ定員ヲ中少佐ニ進メ經驗豐富ナル將校ヲ斯界ニ得ル必要ヲ認ムルモノナリ

第二、無線電信ノ改良進歩ハ亦一層目覺マシキモノアリテ現時ノ所要ニ應ズル爲通信術特修科ヲ設ケ専ラ初級將校ヲ養成セシメラレツツアリ然ルニ少尉候補生任命後二ケ年ニシテ砲水兩校ニ八ヶ月ノ學校生活ヲ送り再ビ海上勤務ニ轉ジ更ニ本特修科ヲ修ムルガ故ニ修了後幾ナラズシテ大尉ニ進級スルコトトナリ艦船ニ配乗セラルルニ至リテハ分隊長トシテ一砲露指揮ニ當ラザルベカラズ折角修得シタル通信術ヲ實際ニ活用シ得ル時機ハ一瞬ノ間ニ過ギズ斯クテ本特修科養成ノ目的ニ背馳スルニ至ル

此ノ弊ヲ救済セムニハ水雷學校ノ普通科高等科兩教程ノ間ニ一貫セル聯絡ヲ設ケ高等科教程ニ若干ノ按排ヲナシ兩科ヲ修得セル將校ヲシテ無線電信術ニ關スル伎倆ニ於テ通信術特修科卒業者ト逕庭無カラシメ水雷長亦ハ驅逐艦長トシテ配員セラルルニ當リ新術ノ管督ニ任シテ遺憾無カラシムルニ在リ(中略)

水雷、電信二術ノ素養ト經驗ヲ有スル將校ハ海軍ノ一秘寶ナリ今日斯ノ種ノ將校ニ俟ツモノ頗ル多シ從ツテ此軌道ヲ進ム將校ヲシテ在來ノ如ク前途軌道ノ中斷ヲ願慮セシムルコトナク豁然トシテ目的點ニ直進セシムルノ途ヲ拓キ置クハ現下ノ最大必要事ナリト信ズ

右第一、第二ノ理由ニ依リ大戦艦ノ水雷長及驅逐艦長ノ一部(三百五十噸以上ヲ適當トス)ヲ中少佐ヲ以テ補職セラルルヲ必要ト認ム

爾後ニ於ケル關係定員ノ改定ヲ見ルニ大正二年竣工ノ金剛ニ於テ始メテ中佐水雷長ヲ又明治四十四年竣工ノ海風、山風ニ於テ始メテ中佐驅逐艦長ヲ補セラルルニ至レリ而シテ其ノ後上記ノ中佐定員ハ中少佐ニ變更セラレシガ概ネ山城、扶桑級以上ノ戰艦金剛級巡洋戰艦水雷長及一等驅逐艦(千噸以上)長ニハ中少佐定員ヲ充テ今日ニ及ベリ

右ト相前後シ軍艦ニ於ケル水雷分隊ノ編制法、水雷分隊及水雷砲臺ヲ特設シ置クノ利害要否等ニ就キ實施部隊側ニテ論議ヲ聞クニ至リシガ教育本部長ハ之等ノ論議ニ鑑ミ次ノ上申ヲ爲シ之ガ取捨採否ニ一歩ヲ進メタリ

教本機密第三四五號

明治四十四年十一月十五日

海軍教育本部長 坂 本 俊 篤

海軍大臣 齋 藤 實 殿

艦内編制中水雷分隊及水雷砲臺ノ處理ニ關シ上申

本年參謀長會議ノ際第一艦隊參謀長ヨリ水雷分隊ヲ廢シ水雷部員ヲ砲臺分隊ニ編入スベキ意見ヲ提出シ亦本年十月第一艦隊司令長官ノ魚形水雷戰艦發射ニ關スル意見中ニモ同趣旨ノ事項ヲ記載アリシ處斯クスルニ於テハ砲火ノ威力ニ影響スルトコロ渺ナカラザルベキ懸念モ有之到底坐上ノ論議ニ依リ其ノ可否ヲ決定シ難キ次第ト思料スルノミナラズ尙軍艦伊吹ニテハ本年一月砲臺數一個ヲ減ズルト共ニ砲臺分隊長一名ヲ減ジ之ヲ水雷砲臺長ニ配シ本年度檢定及戰艦發射ニ於テ最優等ノ成績ヲ得第一艦隊司令長官ノ講評訓示中ニモ「水雷砲臺ノ指揮整然トシテ發射軍紀ノ嚴肅ナルコト伊吹ヲ以テ第一トス」ト賞讃シアリ之ニ鑑ミルトキハ伊吹ノ編制法モ艦艇ニヨリテハ又頗ル適切ナルガ如ク思惟セザルヲ得ズ然ルニ普通ノ軍艦ニ於テハ現制ノ如ク特ニ水雷砲臺長ヲ置カズ水雷長ヲシテ之ヲ兼ホシムレバ足レリトスル意見モ可有之畢竟此三種ノ方法中何レヲ以テ艦内編制上ノ原則トスベキカハ容易ニ決定シ難キ儀ト認メラルル處ニシテ而カモ魚雷ノ威力ト水雷發射術ト著シク發達シタル今日ニ於テ本問題ヲ適切ニ解決スルコト重要事ト思料候條四十五年教育年度ニ於テ第一艦隊ノ二隻宛テ三分シ上記ノ各方法ニヨリ訓練ヲ行ハシメ其ノ實驗上ノ利害ト成果ニ鑑ミ允分ナル比較調査ヲ遂ゲ以テ本問題解決ノ資ト致度可然御詮議相成度 (別紙實驗方案添付)

(別紙)

水雷砲臺長及水雷部員分隊編制實驗方案

第一案 從來實施ノモノ、即チ左ノ如シ

- 一、水雷分隊ヲ存スルコト
- 二、水雷長ハ兼分隊長ニシテ水雷砲臺長ノ職ヲ探ルコト
- 三、水雷發射ニ際シテハ水雷部員以外ノ水兵部員ヲ適宜區處シ採收等ノ任務ニ充テ又必要ニ應ジ將校ヲ各種關係任務ニ配スル

コト

第二案 第一艦隊意見ニ依ルモノ、即チ左ノ如シ

- 一、水雷分隊ヲ獨立セシメズ適宜之ヲ分割シテ砲臺分隊ニ編入スルコト
- 二、水雷長ハ兼分隊長タラザルト同時ニ水雷砲臺長ノ職務ヲ探ラザルコト彼砲臺長ノ如クナルコト

三、砲臺長ハ水雷砲臺長ノ職務ヲ兼ネシメ戰闘部署ニ在リテハ砲臺長若ハ附將校ヲシテ水雷砲臺ヲ指揮セシムルコト
 四、水雷砲臺ヲ擔當スル砲臺長ニハ附將校二名以上ヲ配スルコト

第三案 所謂伊吹式ナルモノ、即チ左ノ如シ

一、水雷分隊ヲ存スルコト

二、水雷長ハ兼分隊長タラザルト同時に水雷砲臺長ノ職務ヲ採ラザルコト彼ノ砲臺長ノ如クナルコト

三、砲臺區分ニ於テ一砲臺ヲ減スル工夫ヲ爲シ此利シ得タル分隊長ヲ水雷分隊長トシ水雷砲臺長ノ職務ヲ採ラシムルコト(已ム

ヲ得ザレバ分隊長一名臨時増員スルコト)

四、第一案ノ三ニ同ジ

〔参考〕其ノ一

第一艦隊司令長官提出明治四十四年度魚形水雷戰闘發射ニ關スル意見中關係事項摘要

大艦ニ於ケル水雷科將校ノ配員法竝ニ艦内編制ノ改正ニ就テ

現時大艦ノ水雷砲臺ハ兼分隊長タル水雷長ノ直接指揮ノ下ニ置カレ水雷作業ハ他分隊ニ關係ナク獨立ニ施行セラルル組織ナルガ故ニ艦内ニ於テ水雷術ニ關シ直接ノ責任ト相當ノ智識ヲ有スルハ水雷長一人ノミニシテ其ノ唯一ノ水雷長モ既往ニ於テ大艦發射ニ經驗ヲ積ミタルニアラズシテ多クハ其ノ艦ニ就任後初メテ水中發射管ニ接觸セル者ナリ 而シテ此孤獨ナル水雷長ガ無經驗ナル中少尉一人ヲ從屬トシ他ニ所謂相談相手無ク水雷科萬般ノ作業ヲ計劃シ實施シ監督シ改善シツツアル現状ナルヲ以テ縱令水雷長ガ萬能ナリトスルモ其ノ力ノ及バザルハ數ノ免カレザル所ナリ 故ニ現時ノ艦内編制ヲ改メ水雷部員ヲ普通ノ砲臺分隊ニ編入シ分隊長ノ内一、二名ハ水雷科特修將校ヲ以テ之ニ充ツルコトトセバ水雷作業モ砲術作業ト等シク艦内一般ノ業務トナリ之ニ對スル艦員ノ研究心モ一層親切トナルノミナラズ將來ノ水雷長タルベキ素養ヲ各分隊長ニ與フルコトヲ得ベシ若然ラズシテ從來ノ儘ニ推移セバ將來如何ニ水雷兵器ガ改良セラレ如何ニ適切ナル發射實施規程ガ設ケラルルトモ經驗ヲ積ミタル使用者ヲ得ルコト難ク到底斯術ノ健全ナル發達ヲ期スル能ハズト信ズ

因ミニ當時第一艦隊參謀長秋山眞之及海軍水雷學校長進達同校教官山尻唯二兩氏ノ本問題ニ關スル提出意見アリ何レモ前記第一艦隊司令長官意見ト其ノ内容略相合致セルモノナリ

〔參考〕其ノ二

艦内編制ニ於テ水雷分隊ヲ廢シ之ヲ砲臺分隊ニ編入スル意見

明治四十四年十月

第一艦隊參謀長 秋 山 眞 之

現行艦内編制ニ於テハ少員數ノ水雷分隊ヲ獨立セシメアレドモ小官ガ橋立、出雲及伊吹ノ三艦ニ於ケル其ノ實施ノ經驗ニ徵スルニ艦内整理上ニモ又教育訓練上ニ於テモ其ノ利益少クシテ却ツテ不便不利ノ大ナルモノアルガ如シ今其ノ不利ナル點ヲ別記セバ
大要左ノ如シ

一、少員數ノ水雷分隊ガ獨立セル爲各分隊ノ人員數ニ不同ヲ生ジ從ツテ依然「バート」組織ノ如キモノヲ設ケサレバ諸教練事業等ニ勞力ノ不平均ヲ來ス不傾アリ

〔附記〕出雲、伊吹ノ如キ若シ水雷第五分隊ヲ廢スレバ直外第六分隊ヲ除キ水兵部ハ員數不同ナキ正對ナル四箇分隊ニ編制スルコトヲ得教練事業等均等ノ力ヲ以テ各分隊長指揮ノ下ニ行ハレ凡テ純然タル分隊組織トナリ新艦内編制ノ主旨ニ適合スルナリ

二、指揮ノ系統ヲ亂サザルハ軍紀ヲ振肅スル上ニ於テモ又各部員ノ責任ヲ盡サシムル上ニ於テモ最モ重視スベキ處ナリ

然ルニ水雷分隊員ハ魚雷發射ノトキノミ水雷長兼分隊長ノ指揮ヲ受ケ其ノ他ノ教練事業等ニテハ他分隊ニ假ニ編入セラレ他ノ分隊長ノ指揮ヲ受ケシメザルベカラズ是レ軍隊トシテ最モ忌ムベキコトナリ

三、水雷長ハ一艦ノ職員トシテ砲術長ト同等ノ地位ニ立テ艦長ノ直接補佐官(即チ或ル意味ニ於テ參謀官)トシテ艦務上水雷事業ニ關スル計畫及監督ノ任ヲ有セリ艦内ノ事業小ナナリト雖モ計畫ト實施ハ大綱ニ於テ區別シ置カザルベカラズ即チ艦長ハ航海長、砲術長、水雷長ヲ補佐トシテ計畫、發令及監督ノ地位ニ立テ副長及各分隊長ハ實施、受令、被監督ノ立場ニアラシメ以テ各職員ヲシテ遺憾ナク其ノ責任ヲ盡サシムルハ軍艦職員勤務令ニモ示定シアル處ナリ然ルニ水雷長ニ限り分隊長ヲ兼ホ計

盡ト實施、監督ト被監督ヲ一身ニ負ハシムルハ職務ノ分限ヲ混淆スルモノニテ單ニ水雷長ノ要職ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズ水雷部ノ整理ハ水雷長自ラ任シテ自ラ監督スルガ如キ變態ヲ來スベシ

四、水雷分隊獨立シテ水雷事業ハ別科ノ如ク施行サルルヲ以テ水雷長及附屬將校ノ外ハ直接水雷事業ニ與カルノ責任無ク從ツテ水雷ニ對スル親切ト注意ヲ缺キ砲術、水雷術運用術等各科普通ノ智識ト經驗ヲ習得スベキ多數ノ大尉分隊長及附屬將校ノ水雷ニ關スル研究心ヲ惹起セズ爲ニ今後益々發達セントスル水雷ニ對シ多數ノ水雷將校ヲ養成シ置ク能ハズ

(附記)各艦ニハ大尉中少尉ニシテ既ニ驅逐隊水雷艇ノ經驗ヲ有シ又水雷學校普通科ヲ卒業シタルモノ等多シト雖モ水雷專業ニ直接關與セザルヲ以テ其ノ實驗ヲ積マシムル機會少シ

五、前項ト同一ノ理由ニ依リ水雷部員ノ外多數ノ水兵部下士卒モ水雷事業ヲ疎外シ自然ノ傾向トシテ事實上少數ナル水雷部員ノ小分業ト化シ去リ現時ノ砲術事業ガ水兵部員ノ一般業務ヲ爲セルガ如クナラシムル能ハズ是レ決シテ將來ニ於ケル時勢ノ要求ニ應ズルモノニアラザルナリ

如上ノ不利ヲ除カン爲ニハ水雷分隊ヲ廢シ之ヲ砲臺分隊ニ編入スルヲ最簡ノ方法トシ之ガ爲教育訓練及戰鬪ノ指揮等ニ決シテ不便ヲ來スコトナキハ小官ガ曾テ三笠ニ副長タリシトキ此ノ編制法ヲ試行シタル實驗ニ依リ證明スルコトヲ得ルナリ人或ハ一分隊長ガ同時ニ砲煩ト水雷トヲ擔任スルトキハ戰鬪ノ際其ノ指揮混雜シテ各武器ノ効力ヲ完全ニ發揮セシムル能ハズト反論スルモノアレドモ斯ノ如キハ現時ノ砲煩射法モ魚雷發射法モ二ツナガラ心得ザル者ノ杞憂ニ屬セリ現時ノ射法ニ於テハ將校ノ多數ハ射擊指揮ノ幹部員トナリ砲側ニ於テ裝填及照準發射等ヲ監督スルモノハ僅ニ分隊長二名中少尉二三名許ニ過ギズ水雷發射ニ於テモ亦然リト雖水雷ハ其ノ機能上砲術ノ如ク指揮幹部ニ多數ノ將校ヲ要セズ殆ンド水雷長一人ニテ事足レリ故ニ分隊長ガ戰鬪中射擊及水雷發射ヲ同時ニ指揮監督スルガ如キコトハ獨リ其ノ必要ナキノミナラズ自己ノ砲臺スラモ監督セザルノ現狀ナリ本來魚雷ナルモノハ水中ニ發射スル一種ノ彈丸ニシテ發射管ハ取りモ直サズ之ヲ發射スル砲煩ナリ理ニ於テ砲モ水雷モ同種ノ武器ナルニ拘ラズ聊カ其ノ構造ヲ異ニスル爲全ク之ヲ別種ノ如ク思惟スルガ誤謬ノ根源ニシテ此種別ハ宛カモ砲煩其ノ物ニ於テ十二吋砲塔砲ト三吋砲ノ構造ニ差異アルガ如キモノナリ若シ此ノ理想ニ據

ルトキハ水雷發射管ハ水雷砲ト改稱シ魚雷發射ハ魚雷射撃ト改メ水雷砲臺ハ單ニ砲臺ト稱シ毛頭差支ナキモノテ故ラニ之ヲ區別シ業務ノ規定等ヲ複雑ナラシムルノ嫌ナシトセズ艦内編制ニ於テ水雷分隊ヲ獨立セシムルモ亦水雷ニ對スル此偏見ヨリ來レルガ如ク是レ分業ノ形式ニ泥ミテ分業ノ趣旨ニ適合セザルモノト謂ハザルベカラズ若シ茲ニ將來現出セントスル水雷巡洋艦ノ如キ艦種アリテ多數ノ發射管ヲ裝載シ砲ハ僅ニ三吋砲數門ニ過ギズ艦員ノ大多數ハ水雷部員ヨリ成リ砲員少數ナルトキハ依然現時ノ如キ水雷分隊獨立ノ編制ヲ採用スベキカ將又砲員ヲ分離シテ現時ノ水雷分隊ノ如クスルカ何レニシテモ不便不利ノ編制法タルヲ免レズ此故ニ小官ハ單ニ艦内編制ニ於テ水雷分隊ノ獨立ヲ廢シテ普通ノ分隊ニ編合スルヲ至當ト認ムルノミナラズ水雷發射管ハ砲ノ如ク十四吋若クハ十八吋水雷砲ト稱シ水雷部員ハ水雷砲員ト改メ射撃ノ語ハ兩武器ノ共通トシ水雷ニ對スル一種ノ偏見ヲ一掃シ以テ益々斯術ノ發展ヲ期センコトヲ希望スルモノナリ

右ニ關シ四十四年十月第一艦隊司令長官ニ訓令シ大正元年試行スルトコロニアリシガ概ネ第三案ヲ以テ適當ト認メラレシモ配員上ノ關係ニ依リ遽カニ實現シ難キモノアリ暫ク現状ヲ持續スルコトトナレリ

(備考)本件試行前ニ當リ相當多數(海軍水雷學校ヲモ含ム)ノ第一案賛同者アリシハ一奇ト云フベシ(編者曰)

海軍艦船條例ノ爾後ノ變遷概要左ノ如シ

一、大正五年五月軍令海第六號ニ依リ新ニ艦船令ヲ公布セラレ海軍艦船條例ヲ廢セラレ

理由及改正要點

- (一) 軍令ノ形式ヲ採ルテ適當トス
- (二) 現行海軍艦船條例ハ制定以來多年ヲ經過シ數次ノ改正ヲ經タルモ尙海軍ノ進歩、艦船ノ構造等ニ伴ヒ難キモノアリ實驗ノ結果本令ヲ制定スルノ必要ヲ認ム

(a) 實用上ノ必要ニ依リ艦艇ナル總稱ヲ設ケ敷設船、工作船、運送船ニ特務艦ナル總稱ヲ設ク

(b) 時代ノ要求ニ依リ艦内總テノ物件ヲ各用途ニ依リ主管及分擔セシム

(c) 隊ヲ編成セザル驅逐艦ニ必要ニ應ジ軍醫、主計ヲ置ク

(d) 艦船ニ關スル基本ノ法令ナレバ艦船ノ定員類別等ヲ別ニ定ムルコトヲ規定シ之等ノ法令ト連絡ヲ執ル

二、大正八年三月軍令海第一號ニ依リ艦船令ヲ改定シ之ガ施行ヲ命ゼラル

理由及改正要點

軌近ノ軍艦ノ型態及威力ノ増進ニ伴ヒ軍艦ニ職員ヲ増置シ且職員ノ職務權限及指揮配屬關係ヲ一層明確ニ規定スルノ必要ヲ認ムルニ依リ尙各科主管者ニ其ノ科員ノ監督權職團部署ニ於ケル指揮權及各主管事項ニ關スル教育訓練ノ掌握權ヲ認メ之ヲ艦船令ニ明記スル如クス

三、爾後本令ハ左記諸號ニ依リ部分的ニ改定セラル蓋シ何レモ時運ノ進歩ニ應センガ爲ナリ

大正九年軍令海一、大正十年軍令海二、同四、十一年軍令海一、同三、十二軍令海三、同九、十三年軍令海一、同四、

十四年軍令海二、昭和二年軍令海一、三年軍令海四、四年軍令海一、

昭和四年末現行軍艦職員ノ如シ

艦長、副長、航海長、砲術長、水雷長、通信長、運用長、飛行長、整備長、機關長、工作長、軍醫長、主計長、副砲長、分隊長、兵科、機關科、軍醫科、主計科、士官兵科、機關科特務士官、乘組(士官、特務士官、准士官、下士官、兵)

大正三年八月二十六日內令第百八十四號ヲ以テ艦内編制規程中左記ノ改正ヲ行ハル(水雷科ニ關スル

モノノミヲ摘記ス)

改正ノ要點及理由

一、水雷砲臺ノ稱號砲臺ニ準ジ番號讀トナシタルコト

砲臺ノ呼稱ト齊一ニスルヲ便トスルト又金剛型以後ノ艦ニ就テハ舊來ノ呼稱ハ不適當ト認メタルニ依ル

二、電信員ヲ水雷部員ト爲シタルコト

電信員ハ教育上水雷長ノ下ニ在ルヲ以テ之ヲ水雷部員トナスヲ適當ト認メタルニ依ル

三、探照燈員ヲ發射管員ノミノ兼務ト爲スヲ不適當ト認メ他ノ水雷部員ヨリ廣ク兼務セシメ得ルコトトセルコト

トトセルコト

四、砲火指揮官以下ノ幹部員及水雷砲臺長以下ノ幹部員ノ解説ヲ加ヘタルコト

五、本規程ノ適用範圍ヲ一等砲艦以上ノ軍艦ニ改メタルコト

小艦ニ大艦同様ノ規程ヲ強フルノ非ナルト教育規則ト歩調ヲ同フスルヲ可ナリト認メタルニ
ヨル

大正三年十一月二十八日軍令海第十號ニ依リ艦隊令ヲ制定シ從來ノ艦隊條例ヲ廢セラレ尙同時ニ艦隊平時編制ヲ定メラルルニ及ビ水雷戰隊ノ如キモ年度ノ始終ヲ通ジ建制的ニ艦隊ノ一部トシテ教育訓練ニ從事シ得ルニ至レリ而シテ艦隊平時編制定ノ理由トシテ擧ゲラレタル要點ヲ示セバ次ノ如シ

熟ラ考フルニ我第一艦隊ノ現編制ハ二十餘年前ニ於ケル常備艦隊ノ制ヲ踏襲セルモノニシテ往時艦艇未ダ備ハラズ其ノ殆ンド全部ヲ擧ゲテ各種ノ任務ニ服シ尙且濶擊其ノ他特種ノ警備ニ兵力ノ不足ヲ訴ヘタル時代ニ在リテハ常備艦隊ハ我海軍力ノ中堅トシテ各

種戰技ノ講究訓練ニ從事スルト共ニ常時急ニ應ズルノ準備ヲ整ヘ且其ノ廠容ヲ必要ノ地點ニ張ラシムルハ正ニ適當ノ制ナリシト信ズルモ爾後艦艇ノ數増大シ支那沿岸其ノ他ノ警備ニ服スル艦艇亦乏シキヲ告グズ然モ時世ハ戰時ニ對スル眞摯有効ナル訓練講究ヲ要求スルコト愈々急ナリ是ニ於テカ一方第一艦隊ニ負荷セシメタル警備ノ責任ヲ輕クスルト同時ニ一朝戰列ニ加ハルベキ有力ノ艦艇ハ豫備艦艇シテ不完全ナル教育訓練ニ放任スルヲ避ケ出來得ル限り之ヲ併合シテ一層戰時ノ狀況ニ適切ナル訓練ニ從事セシメムガ爲艦隊ノ編制任務ヲ改定スルノ緊要ナルヲ認ム 蓋シ平時ノ艦隊編制ヲ戰時編制ニ一致セシムルコトハ現時英獨海軍ノ實行シツツアル所ニシテ吾人ノ理想モ實ニ茲ニ外ナラズト雖彼我各般ノ事情ヲ異ニスル我國ニ於テハ今日運カニ之ニ倣フコト能ハズ依テ海軍豫算ノ現狀況ニ於テ先ヅ以テ時世ニ應ズル最良ノ方法トシテ本案ヲ立案シタルモノナリ

本改正案ノ要點ハ

- 一、海軍豫算ノ現況艦隊ノ艦數増加ヲ許サザルガ故ニ艦隊ノ行動ヲ其ノ教育年度ノ前期數個月間即チ主トシテ各艦各個訓練ノ期間ニ於テ制限ヲ加ヘ由テ節約シ得タル處ヲ以テ艦數ヲ増加セントスルモノナリ
 - 二、戰時第一ニ戰列ニ加ハルベキ艦艇ヲシテ連續訓練セシメ置カムトスルニアリ
- 當時定メラレタル艦隊平時編制左ノ如シ

艦 隊 平 時 編 制

第 一 艦 隊		第 二 艦 隊		第 三 艦 隊		第 一 水 雷 戰 隊	
艦 號	艦 船 隻 (隊)	艦 號	艦 船 隻 (隊)	艦 號	艦 船 隻 (隊)	艦 號	艦 船 隻 (隊)
第一戰隊	八隻	戰艦、巡洋戰艦		第三戰隊	四隻	巡洋艦	
						巡洋艦	
						驅逐艦	
							四隊
行動區域		本邦、支那、東亞露領沿岸		指揮官		司令長官 一 司令官 四	

則 附	練 習 艦 隊	第 三 艦 隊	第 二 艦 隊				第 一 艦 隊	
			第 四 水 雷 戰 隊		第 二 水 雷 戰 隊		第 三 水 雷 戰 隊	
一、必要ニ應ジ第一第二艦隊ヲ合セ聯合艦隊ヲ編成ス 二、聯合艦隊、第一艦隊及第二艦隊司令長官ハ教育訓練上ノ必要ニ應ジ一時麾下艦隊ノ編制ヲ變更スルコトヲ得 三、艦船欄内ノ隻數若ハ隊數ハ之ヲ減ズルコトヲ得 又第三艦隊ニ限り必要ニ應ジ隻數ヲ増シ且本表以外ノ艦種ニ屬スル艦船及驅逐隊ヲ編入スルコトヲ得 四、必要ニ應ジ各艦隊ニ運送船ヲ附屬ス 五、當分ノ間第四水雷戰隊ヲ置カザルコトヲ得	巡 洋 艦	巡 洋 艦 海 防 艦 砲 艦	潛 水 艇 隊	巡 洋 艦、海 防 艦ノ内	驅 逐 隊	巡 洋 艦	驅 逐 隊	巡 洋 艦
	四 隻	八 隻	二 隊	一 隻	四 隊	一 隻	四 隻	一 隻
	必要ニ應ジ特ニ定ム	揚子江流域及膠州灣 以南(膠州灣ヲ除ク) ニ於ケル支那沿海暨 灣並ニ澎湖列島	本 邦、支 那、 露 領 沿 海	司 令 長 官	司 令 官	三	一	
	司 令 官	一						

右ニ依リ同年十二月一日附新艦隊編制左ノ如シ

第一艦隊

第一戰隊 河内、金剛、攝津、安藝、薩摩、比叡

第三戰隊 鞍馬、生駒、平戸、筑摩

第一水雷戰隊 春日、第十七驅逐隊(櫻、橘)、第六驅逐隊(春風 外三)、第七驅逐隊(長月 外三)、第十四驅逐隊(追風 外三)

第三水雷戰隊 韓崎、駒橋、第二潜水艇隊(第八、九、十、十一、十二、十三)

第二艦隊

第二戰隊 相模、香取、三笠、周防

第四戰隊 八雲、常磐、千歳、磐手、日進

第二水雷戰隊 利根第二驅逐隊(沖風 外三)、第八驅逐隊(白露 外三)、第九驅逐隊(白雪 外二)、第十二驅逐隊(浦波 外二)

第三艦隊 青羽、明石、秋津洲、對馬

其ノ他 (略)

(參考)

一、從來ノ艦隊條例ヲ廢シ艦隊令制定ノ主旨トスルトコロハ海軍ノ進歩ニ順應スルト共ニ平戰時ニ於ケル艦隊編制ノ要素及各職員ノ職責ヲ明示セムガ爲艦隊條例ヲ廢止シ本令制定ノ必要ヲ認メタルニ依ル

二、本艦隊令ハ爾後左記改變ヲ經テ今日ニ及ベリ

大正五年軍令海五、大正六年軍令海一、大正八年軍令海二、大正十二年軍令海八、昭和三年軍令海一、同海五

大正五年入ニリ發射機操式ノ一部ヲ改正シ新ニ射手ヲ設ケタルモ當分定員ヲ増加セラレズ

因ニ記ス本件ハ今日ニ至ル迄特ニ増員ナキノミナラズ後記スルガ如ク水雷部員ハ漸次甚シク減少セラ

レ
タ
リ

目次